

序

世のなかには優れた集中治療の本がたくさんあります。ここ数年以内に出版または改訂された日本語の教科書だけでも、「ワシントン集中治療マニュアル」(メディカル・サイエンス・インターナショナル)、「集中治療、ここだけの話」(医学書院)、「ICU/CCUの薬の考え方、使い方 ver.2」(中外医学社)、「ICU実践ハンドブック改訂版～病態ごとの治療・管理の進め方」(羊土社)、「集中治療999の謎」(メディカル・サイエンス・インターナショナル)と、枚挙にいとまがありません。トピックスを絞った教科書も合わせると、膨大な数になります。

それらの教科書に手を伸ばして読む… そう、それで十分です。本当は、

さてさて、そんな素晴らしい教科書を読む前に、この本の中身をパラパラと見てください。今回の増刊のコンセプトは、

- ① 集中治療の「基本の基本」の知識が得られる(これだけでも十分! っていう方も多いはず)
- ② 集中治療の「基本の基本」の考え方がわかる(他の教科書を読むときに、ムツチャ読みやすくなる)

です。すなわち、最初にちょろっとこの本を読んでおくと、集中治療の下地ができて、少し苦手なICUの患者さんのベッドサイドに堂々と向かうことができる、もしくはさらに上をめざして他の教科書を読むことができる、というわけです。

今回は特に、「どの地域やどの医療機関に行っても使える知識」を意識して編集しました。いずれの項目も、病院が変わろうが、診療科が変わろうが、活動地域が変わろうが、上級医が変わろうが、絶対に使える知識であると胸を張っていえる内容を、フロントラインにいる一級の先生方に執筆していただいています(第1～4章)。

さらに、看護師・薬剤師・理学療法士・臨床工学技士のスーパーエキスパートにも執筆してもらいました(第3章)。彼らの項目を読むことで、集中治療の知識だけでなく、患者さんと家族のために誰をどんなタイミングで頼ればいいのかもわかるようになっていきます。

きわめつけは、「協働」の項目(第4章3)です。チーム医療を実践するにあたり、非常に大切なことにもかかわらず日本の医学生に隠され続けてきた(大学であまり教えられずにきた)、「何かを誰かとともに行うための方法論」の基礎の基礎を、わかりやすく書いてもらいました。これらの知識はもはや常識となりつつありますが、まだまだ医師の世界では触れる機会が多いとはいえません。この項でその必要性や重要性をわかっていただけたと思います。

…ワクワクしてきませんか? ぜひ、楽しみながら、読んでください!

2019年11月

神戸市立医療センター中央市民病院 救命救急センター・EICU

瀬尾龍太郎